

アジアの自然と文化

総合文化研究所の方針の一つ、「アジアに関わる研究」の一貫として、「アジアの自然と文化」プロジェクトは2006年4月から2008年3月までの2年間の研究を終え、その研究実績をここに提出する。本プロジェクトは2004年度まで実施された何回かの「アジアの生活と文化」の枠組みを拡げて現在危急の課題である環境問題接近への足掛かりをアジアの国々を場として研究しようとして出発した。従ってグローバルの視点で地球全体をみるとアジアの現状を見ることは、普遍性と個別性のバランスをいかに取るか、特に急激な経済的発展を目指すアジアの諸国にとって大きな問題である。特に、京都議定書で示されたCO₂削減問題はアジアの国々にとって困難さの極みとも言えるものである。しかし地球の将来、否、人間の将来を考える時、アジアから新たな考えを提示し発信しなくてはならない。しかしながら我々はアジアの自然と文化の現状をしっかりと認識することが急務であるという考えからこのプロジェクトを始めることにした。例えば環境について語るにしても、我々はその基盤となる文化に収斂するアジアの自然観、人々の生活、歴史的事実、そして公に認められる科学的データを必要とした。また2007年にはゴア氏がノーベル平和賞を受け、環境を地球的規模で論じることが不可欠となった。研究成果執筆の2008年現在を含めて、この3年間アジアの国々には自然と文化に関わる様々な出来事が起こった。インド洋周辺国で大規模な被害をもたらした津波、ミャンマーでの大水害、インドネシアの地震、中国四川大震災、フィリピン及び中国への台風上陸とその被害、そして鳥インフルエンザの人間への波及そして発病、他方では北京オリンピックの開催、そしてアジアに注がれる世界からの目、世界的経済の混乱、研究プロジェクトの開始から現在までの我々自身のアジア観がどんどん変化して行くのを経験した。

研究分担者と研究題目は、1) 橋本典子(芸術学科)「荘子の自然観とその影響」、2) 渡部徳子(家政学科)「グローバリゼーションとアジアの自然環境」、3) 八耳俊文(教養学科)「アジアの科学と技術」である。

研究プロジェクト主催の講演会は全部で6回、1) 中條利一郎東京工業大学名誉教授「論語から見える現代中国」、2) 順天堂大学医史学研究室吉田和裕氏「東アジアにおける『東医宝鑑』」、3) 猪俣道也東京農業大学教授「地質学者との交流から見た北朝鮮」、4) 江幡武東北大学名誉教授「吉林省植林事業から見える中国事情」、5) 藤倉良法政大学教授「中国の資源と環境」、6) 五野井隆史聖トマス大学教授「ヴェトナムにおけるキリスト教」であった。

初年度(2006年)は、アジア特に中国との基礎科学の大学間交流の実態、吉林省での植林という実践を通した具体的環境対策、東洋医学書『東医宝鑑』の韓国での実践、科学的データの情報交換の実例、中国東北部と北朝鮮の鉱物資源の豊富さ、について学び、2007

年度は、中国の工業都市の煤煙の現状を科学的データ及び煤煙対策後との比較写真を通して知ることが出来た。中国でのデータの出所による信憑性の有無について、様々な実態と共に説明がなされ、多くのことを新たに知った。そして最後にヴェトナム王朝とキリスト教の宣教師達の関係、異文化受容のアジア的特質などを学んだ。

研究分担者3名の関心はともに中国であったので、書籍は中国の古典的テキスト、歴史書、新たな資料、そしてグローバルゼーションの視点から温暖化をふくめた環境論、大気中の化合物による環境の現状についての最新データ集などを買った。また、研究分担者は、福井、京都（八耳）、インド、韓国（橋本）で情報交換と研究、渡部は関西とドイツの学会でグローバルゼーションの視点から地球温暖化、大気中の化学物質等について共同研究及び討論をした。これらの研究のため旅費を使った。

以下に4点の論文を研究成果として報告する。

橋本は、中国の老荘思想の芸術への影響を“虚”や“無”を介した「道」を中心に考えた。東洋の自然観では自己を無にして現実を超越し、絶対者や一者、つまり天に達する形而上学を主張する荘子の考えが最も重要である。八耳は、1931年から1945年まで在った上海自然科学研究所の化学科の目的、中国大陸での地球化学研究に従事した日中の研究者11名の戦後を扱った歴史研究を行った。五野井は、17世紀の日本とヴェトナムとの関係を朱印船の往来とその中のキリシタン達の役割を日本町を中心に歴史的に明らかにした。その中で日本町の存在は特筆に値する。渡部はアジアの自然環境問題を客観的データに基づき、中国を中心に論じ、現代科学技術の発展によって化石燃料に変わる新たな技術の可能性をグローバルゼーションの視点から論じた。日本からの提案の一つとしてこれからの環境に調和したメタンハイドレートの研究開発を指摘している。アジアの自然と文化に関する研究は今後の重要な課題である。

（橋本典子）

文化における自然とのかかわり―「荘子の自然観」を中心に―

橋本 典子 （芸術学科教授）

上海自然科学研究所化学科の人々の戦後

八耳 俊文 （教養学科教授）

ヴェトナムとキリスト教と日本

―16・17世紀コーチシナにおけるキリスト教宣教を中心にして―

五野井隆史 （聖トマス大学教授）

グローバルゼーションとアジアの自然環境

渡部 徳子 （家政学科教授）